

香港アクション映画が描く身体

—『ブレード/刀』を中心とした理論的考察

雑賀広海 (京都大学)

今日、世界中のアクション映画が香港映画の影響下にあると言っても過言ではない。本発表は、その香港アクション映画が描く身体表象の独創性に着目する。徐克(ツイ・ハーク)監督の『ブレード/刀』(1995)を分析の対象とし、身体について理論的な考察をおこなった先行研究を土台にして議論をおこなう。以下に、『ブレード/刀』が香港アクション映画を体系的に捉えるうえで示唆的な作品であることを説明し、その後、映画理論における身体の問題と本作の関連を述べる。

徐克は監督やプロデューサーとして数々のヒット作を生みだし、1980-90年代の香港映画を牽引した。ただし、徐克を単に商業主義とみなすことができない作家であることは、デイヴィッド・ボードウェルやスティーブン・テオが論じているとおりである。たとえば、『ブレード/刀』は『片腕必殺剣』(1967)のリメイクであり、香港映画では繰り返されてきた片腕ヒーロー作品であるが、片腕が切断される身体欠損シーンのグロテスクさはそれまでの作品よりも過剰である。また、男性の裸体にむけられた女性の性的まなざしは、従来の香港アクション映画では忌避されていた身体のセクシュアリティを顕在化する。アクション・シーンにおいては、早回しや執拗に同じ動作を反復する振り付けなど、過剰な身体の描写が特徴的である。これらのシーンから、『ブレード/刀』は香港アクション映画というジャンルにありながら、それを相対化しようとする作品であると言える。

こういった身体の描写が映画理論で重要な問題として注目を集めるようになったのは1990年前後のことだった。身体の問題とは、言い換えると、映像が観客の身体に与える刺激や映像の触覚性に関する議論のことである。これらの研究は現象学やポスト構造主義を参照することで、1970年代から盛んになる精神分析学を応用した映画研究とは異なる解釈を旨とした。こうした先行研究が議論の対象とするのは欧米の作品がほとんどである。しかし、身体論の研究にとって、身体アクションの表現技法という点で世界的な影響力をもつ香港アクション映画を無視することはできない。

本発表の目的は、身体論を更新することというよりは、映画メディアを使った身体表象のローカル性に光をあてることである。すなわち、香港映画というローカルな場で築きあげられた独創的なスタイルの解明を試みる。『ブレード/刀』に見られる身体欠損、男性身体への性的まなざし、身体アクションの振り付けや編集といった要素から、リンダ・ウィリアムズ、ヴィヴィアン・ソブチャック、スティーブン・シャヴィロらが論じた映像の触覚性や内臓を抉るような(visceral)刺激を見出し、先行研究では見過ごされていた身体ジャンルとしての香港アクション映画の特異性を明らかにする。